

「変わりゆく色 なじむ色」(広尾の掌編小説 7)

どことなく広い距離感とゆるやかな人通りを秋めいた風が通りぬけていく。午後三時を過ぎた散歩通りは穏やかにぎやかさが流れていた。

用事を終えて久々に商店街のお店をなんとなくしに眺めながら歩いた。

建物の色から看板やのぼり、暖簾までカラフルな色で景色がきらめいて感じるのは、単に陽の光をあびているからではないのだろう。

広尾をさまざまに彩っていく店はパレットの絵具に似ている。

そして地元の人や店員さんはキャンバスに色をのせていく絵筆。

私は画のなかを歩いているみたいだと思った。

「ここにこんなお店、あったかしら」

独り言をこぼしてしまうほど街の様子は思ったより新しい風が入っていた。

あまりにも前からその場所に建っていたように溶け込んでいるものだからぼんやり歩いていると最近できたお店だとは気が付かずに

うっかり通り過ぎてしまいそうになる。

はじめて目にする複合施設のビルが、激しくは主張していないながらもしっかりとスタイリッシュにたたずんでいた。

開放的な正面入口から店内の洗練された椅子とテーブルやカウンターが見える。案内のプレートを見れば、六階建てのうち二階まではおしゃれな食事処がそろっているようだった。

美味しいもの好きのあの人が好きそうだわ、とつい笑みがこぼれる。時間が出来たら一緒に訪れてみよう、とまた行きたいお店候補が増えた。

広尾は相変わらず“変わらないまま”と“変わっていくもの”とが共存していた。

このビルもいつかは、いつ訪れてもここにあるお店になっていくのだろうか、色としてなじんでいくのだろうか、ぼんやりと考えながら通り過ぎる。

商店街の奥へと進んでいくと芳ばしい匂いが鼻をくすぐった。

焼ける生地の良い香り、ローストされたオニオンにチーズのとろけた匂い。傍を通るといつも食欲がかきたてられて困ってしまうほどなお店・THE PIZZA。



一面がガラス張りの店は楽しげに歓談するお客の姿が目に入る。

変わったものがいつからか“変わらずにある”になっていくのもまたこの街の色だと思っている。

この THE PIZZA も開店した当初は広尾の変化とと思っていたけれど、いまはこうして「あ、今日もやっている」と馴染んでいる。オープンしたてにあの人と来たのを思い出して頬が緩んだ。

いつもならあの人の仕事終わりを待って商店街を寄り道しながら帰るのだが、今日の打ち合わせは長引くかもしれないと言っていたので家で夕飯を準備して待つほうがいいだろう。

このところ仕事が立て込んでいるようでもあるし、息抜きに外出もままならない時勢だから、せめてとびっきり美味しいご飯と、食後のデザートとお茶を用意してあげよう。

今晚はなにがいいかしらと思考をめぐらせて歩いていると、深い青地の天幕に「arobö」の白文字が目に入った。



このお店も、変わらず開いてくれている嬉しさ。

そういえば前にここで食後のおやつに買ったクッキーを、あの人が幸せそうな顔をして食べていた。

今晚のおやつはあのクッキーにしよう。いまでも売っているかしら。

その日はたしか夕飯も arobö で買った有機野菜でミネストローネを作った。

いつもわたしの作るご飯を美味しそうに味わってくれる人だけど、あのミネストローネのときはとくに、いい食べっぷりだったのが記憶から浮かんできた。

近所の八百屋ではなかなか手が出ない有機野菜も、このお店に並んでいるものは色の濃さと艶がひとときわ美味しそうで、つい買ってしまふ。

今日はすこし贅沢に arobö で食材をみつくろうことにしよう。

弾む足どりで店の中へと進んでいった。

完

作・天風 凜 (あまかぜ りん)